

平成25年度 第4回宮崎県社会教育委員会議 議事録

期日：平成26年2月12日（水）

午前10時～正午

会場：県庁4号館 会議室

テーマ1 家庭教育支プログラムについて

- 保護者や祖父母、地域の方が楽しく気軽に学ぶことのできる学習プログラムはどうあればよいか。

議 長 これまで〈みやざき「親学び」プログラム〉ということで検討してきたプログラムについて、事前に原案が届けられているが、まず事務局から説明をお願いします。

事務局 これまでの検討をもとに原案を作成した。まず、プログラムのネーミングについては、当初子育て中の保護者と将来の親世代を対象にしたプログラムを作成する予定であったが、地域全体で家庭を支えるものにしたいという意見をいただき、〈みやざき家庭教育サポートプログラム〉という名称にしている。教育委員会が作成するものなので、「家庭教育」という言葉を盛り込んだ。

次に、プログラムの種類については、対象ごとに5つに分類している。プログラム①②は保護者向け、③は将来の親世代向け、④は祖父母・シニア世代向け、⑤は地域住民向けとしている。プログラム①②は子どもの発達の段階に応じるようにしている。特色としては「子どもの個性と夢」というテーマを設けて、単に子育てのスキルを学ぶだけでなく、楽しみながら子育てをしていくという委員の皆様の意見を反映させている。また、自然体験や社会体験等、地域との関わりについても取り入れており、宮崎県のプログラムの特徴になるのではないかと考えている。③の将来の親世代向けでは、自立した大人になるためのテーマを設けている。プログラム④⑤は全国的にもあまり例がないが、この点でも宮崎の特色が出てくるのではないかと考えている。

今回のプログラムは全て60分という時間設定にしているが、講座の時間に合わせて、例えば45分で実施する場合は、二つの活動の一つにしばったり、90分で実施する場合は活動の時間を延ばしたりするなどの運用を考えている。導入のアイスブレイクについては、いくつか例示している。最後のまとめについては、前回、読み聞かせが有効ではないかという意見をいただいたので、全てのプログラムに取り入れる予定である。ワークショップの種類についてはロールプレイ、ラベルワーク、ランキング、ディベート、シュミレーションなど、様々な手法を取り入れている。また共同でマップや暦を作成したり、我が家のルールを作ったりする活動も取り入れている。各プログラムは進行表、進行マニュアル、ワークシートの3点をセットにしている。

委 員 地域との関わりのプログラムに、親自身の自然体験について意見交換する活動があるが、今の親がどのような体験をしているかを想定しておく必要があるのではないか。

事務局 あまり自然体験の経験がないという場合は、子どもの頃の遊びなどを話してもらい、できるだけ自分の経験から話してもらいたいと思っている。

委員 活動に＜我が家のルール5か条＞が出てくるが、何かモデルがあるのか。その場でいくつかできればよいという感じなのか。

事務局 必ず5つということではなく、これを実践したいと思うことをいくつか作ってもらおうと考えている。

委員 必ず5か条ということではなければ「我が家のルールを考えよう」といった進め方でよいのではないかと。



委員 携帯電話やインターネットの使い方についても＜我が家のルール5か条＞が出てくるが、ここにも具体例を示してほしい。子どもだけでなく親も携帯電話のメリット・デメリットを知っておくことが大事なので、具体的なことを示しておくとう分かりやすいのではないかと思う。

委員 あまり細かく指示せずに、自分たちで「我が家のルール」について考えることも必要だと思う。与えられたことをクリアすればいい、これだけやっておけばいいと考える保護者も増えてきている。トレーナーが判断していけばよいのではないかと思う。

委員 「例えば○○○」というような、考えるためのヒントを出しておいて、その後は自分たちで考えるようにするとスムーズにいくと思う。

事務局 意見が出ないときに使えるエピソード等を例示するようにしたい。

議長 これを基本にして地域に応じた学びにすることが大切である。

委員 トレーナーの力量が問われると思うので、実施してどうだったかを振り返るフォローアップ研修も必要であると思う。

携帯電話やゲームの問題は低学年の子どもにも関係することなので、低学年の子どもをもつ親向けにも活用できるようにするとよい。

委員 「親子のコミュニケーション」については、子どもの悩みから親子のコミュニケーションを図る流れになっているが、思春期の子どもは親とはなかなか話をしない。子どもの本当の悩みに親が気付かないこともあり、意見が出にくいと思われる。

そこで、親たちに「自分の中学時代を思い出してみよう」といった、親自身の経験を思い出させるようなアプローチをするのがよいのではないかと。その中で、子どもの気持ちに一步近づいていくという段階があった方がよい。

一般論に終わらせないためにも、「中学生の頃、自分は親に対してどう接していたか」を振り返る活動を入れるとよい。

委員 今の子どもたちは、携帯電話やラインを使っていないと仲間はずれにされるという状況もあるのではないかと。トレーナー用の資料には、これに関係する資料を入れておくとよい。

委員 中高生・青年等を対象にしたプログラムでは、「親になるための学習」という内容をもっと強くする必要はないかと思う。「家事・育児について考えよう」よりも「家事・育児は誰の仕事？」というように、直接的な投げかけの方がリアルではないかと思った。

委員 高校でも家庭科の授業や総合的な学習の時間に活用することは可能だと思う。このプログラムを基本として、学校がどう活用するかが課題であると思う。

委員 中学生の「親になるための学習」の授業は、親にも見てもらう機会をもつとよいと思っている。

委員 公民館講座等で、親子で学ぶ「親子講座」として活用できるとよいのではないかと。いろいろな活用ができるということを発信していくとよい。大学の授業の中に組み込むことは難しい点もあると思う。



委員 中高生・青年等を対象にしたプログラムの中の「家族の一員として」というテーマを前面に出した方がよいと思う。「男女の協力」というテーマでは、一人親の家庭もあることから配慮が必要になる。「家族の一員として」という発想を子どもの頃からもてるとよい。そこから「働く」というテーマにもつながっていくと思う。

委員 「働くことについて考えよう」というテーマがあるが、自分の親が、自分のなりたい職業と同じならいろいろなアドバイスもできるが、そうではない場合はアドバイスできないことも多い。このテーマについては、子どもだけでなく、親も一緒に学んでもらうことも大切ではないかと思う。また、いろいろな職業の方に来てもらって、話をしてもらうことも必要だと思う。

委員 婦人会では参観日等で託児をした後に、母親達の相談を受けているが、このプログラムを家庭教育学級に入れてほしいと思う。そういうシステムを入れてほしい。具体的な体験学習ができる。

委員 シニア向けのプログラムは、いろいろなところで使える、楽しいプログラムだと思っている。

議長 秋田県は学力が高いという報告があるが、祖父母の出番が多いと言われている。

委員 いろいろな技を持っている年配の方もおられるので、児童館の中のプログラムに組み入れるとよいと思う。その仕掛けが必要だと思う。

委員 祖父母の中には、毎日孫に会っている人もいれば、たまにしか会えない人もいる。孫のしつけを考える上では、状況に応じて分けた方がよいのではないかと思う。

事務局 いろいろな生活環境が考えられるが、環境が違う人たちが一緒に話し合う中で、お互いの状況における対応の仕方が分かり合えることもあると考えている。ワークショップを取り入れて参加者同士で学び合う中で、新たな気付きにつながることを期待している。

委員 孫は自分の子どもではないので、「しつけ方」というより「遊び方・接し方」という、柔らかい方向に持って行ってほしい。

委員 年齢を重ねると固定化された人たちとの交流が多くなると思われるので、高齢者クラブなどを通して組織的に進めていくことが必要だと思う。



議長 高齢者クラブの対象者は年々多くなっているが、組織率は下がっている。このプログラムを活用した研修会で、組織率の向上、地域の活性化も図っていけないのではないかと思う。

委員 祖父母の思っていることと、実際の親の思いにはギャップがあると思う。事前に親の思いをビデオで流して知っておいてもらうなどの工夫が必要ではないかと思う。

また、お互いの孫自慢にならないように、学習のねらいをしっかりと伝えるなどの配慮も大切である。

委員 対象別にプログラムがつくられているが、プログラム相互のリンクが図られるとよい。例えば、「シニアの知識や技」と「子どもとともに地域で学ぶ」などは関連が深い。

委員 「地域向けのプログラム」に、若者が地域に根付くためのテーマがあると、みんなで考えやすくなるのではないかと思う。

事務局 このプログラムは、家庭教育支援を基本としているが、この学びを通して、地域を愛する心を育てることで、若者が地域に残ってがんばろうという気持ちを高めたいと考えている。

また、地域住民向けのプログラムの活用場としては、地域の子ども会や自治会などを想定している。自治会を管轄している部局との連携も図っていく必要がある。

委員 これまでも言われてきたことであるが、参加しない人を呼び込む手立てが必要である。「参加してみようかな」と思わせるような仕掛けをどうするかということも、違う意味の視点になると思った。

議長 いわゆるコミュニティ社会の問題である。理想としては、日常生活の中で意識をせず、自然体で、みんなで清掃をしたり、子どものことについて話し合いをしたりすることができるようにする。そこに至るには、行政と住民が一体となって取り組む必要がある。その土壌があるとプログラムが生きる。

委員 自治会等の会合に行くと、次の行事をどうするかという、具体的な取組の話になりがちである。このような教育プログラムがあって、これに取り組むということは、概念的な話ができるという点で、有効に使えるのではないかと思う。

委員 自治会等で次年度の計画を立てる際に、まずプログラムをもとに話し合いをして、その後に具体的な取組について協議すると、前年の踏襲ではなく新たな発想が出てくるのではないか。そのような流れを提案していくとよい。

委員 地域でいろいろな活動を活発に行っているところは、それに従事している人が一生懸命に取り組んでいる。

しかし、同じような目的で活動している団体があり、連携すれば効果が出ることまでには気付いていないこともある。行事をこなすことだけでなく、このプログラムが概念全体を見る機会や概念を植え付ける機会になるとよい。そういう意味で重要なものになるのではないかと思う。



このプログラムが実践されると、これをきっかけに新たな展開がうまれると期待できる。現場でのプログラムの実行となると、トレーナーの力量になるが、極力、目で見せる工夫をするとうい。また、全ての講座で事後アンケートを取るようにして、次の講座に生かしたり、トレーナーのレベルアップにつなげたりする工夫をしてほしいと思う。講座の様子をビデオに記録しておく、別の講座の素材にもなる。

議長 このプログラムを活用することによって、地域づくり、地域の活性化につながるという視点をもった指導者を育ててほしい。

委員 指導者になる人は限定されがちで、他の分野でも活動している。できれば、重なりがないように配慮して、幅広い指導者育成をしてほしい。

議長 いかに継続させるかも大事である。

委員 家庭教育サポートプログラムということで、子育て中の保護者が対象となっているのは当然であるが、子育ての当事者である保護者自身、PTA組織が、「このプログラムは子育てを地域全体で支えようとしているものだ」ということを十分理解しておくことが必要であるとする。



「してもらっている」という感覚では困ると思う。「自分たち自身が学んでいかなければならない存在なのだ」ということと分かってもらうためにも、PTA組織や地域住民と連携したアプローチが必要である。

委員 このプログラムをどう周知していくかが大きなポイントとなる。

事務局 委員の皆様の団体等では機関誌も発行されているので、PRをお願いしたい。

委員 県PTA連合会には、県内各地からの参加があるので、まずそこで実施してみたいと思う。このプログラムに加えてソーシャル・スキル・トレーニングも関連させていけるとよい。

議長 プログラムのネーミングは、提案されている「みやざき家庭教育サポートプログラム」でよいか。

事務局 児童虐待等との関連も出てくると思われるので、知事部局とも十分連携して進めていきたいと考えている。

委員 「親学び」というと親だけを対象にした、親の責任であるという感じを受けるので、宮崎のよさである三世代、地域を含めた家庭での教育であるということを発信する意味では「みやざき家庭教育サポートプログラム」の方がよいと思う。

議長 「みやざき家庭教育サポートプログラム」とすることにしたいと思う。

テーマ2 青年の活力を生かした社会教育活動の活性化について

■ 青年の「資質向上」と「新たなつながり・発見」を図るための支援はどうあればよいか。

議長 次のテーマ「青年の活力を生かした社会教育活動の活性化」については、宮崎県としても大事なテーマであり、来年度に本格的に議論を深めることになると思う。

事務局 前回の会議では、高校生のボランティア部の取組を青年の活動につなげていけないか、成人式の実行委員会方式の取組から地域を担う青年の存在があるのではないかと、青年のニーズの把握が必要ではないか等の意見をいただいた。

委員 婦人会は60年の歴史があるが、その頃から青年団はめざましい活動をしていた。今は、団員の減少もあり、社会活動ができなくなっている状況もよく分かっている。県連としての活動はされているが、地区によって活動に差があり、実際に活動しているところと、そうでないところがあり、こういう機会に県が先導して再編成しようとする取組は心強いし、これから青年に立ち上がっていただきたいと思っている。

婦人会館では、異業種の青年たちが集まって会議をしていることもあるようなので、そういう人たちの情報も得られるとよい。今、宮崎に力のある青年団体をつくることは大切である。それを支援する取組はたいへん良いと思っている。

また、成人式でも青年たちが自ら企画して各地区で実施しているようなので、そこからも人材を発掘していくとよいのではないかと思う。

議長 希望に燃えている青年は各地区にいるが、それがなかなか一つになりきれないところに問題がある。

委員 青年団は何を目的に活動しているのか、私たちにも理解できていない面がある。それで、組織に入って活動したいという思いにつながっていないのではないかとと思っている。それが明確になると今後の組織の充実につながっていく。活動だけに終始すると組織の継続は難しくなる。

事務局 県青年団協議会には16市町村、約500人が加盟している。地区によって活動の形態は様々であるが、地域行事への参画等を通して、地域の活性化を図るための社会貢献活動に取り組んでいる。

議長 青年活動が盛んだった昭和40年代は青年団とSAPがあり、地域で青年が育ってきた。以前、県議会の主力は青年活動を経験された方々だった。地域で生まれ地域で活動してきた人が県を背負う人になっていたと思う。

これからどのようにして地域で青年を育てるかが大切である。地域づくりへの思いをもって活動に取り組む、そのような社会をどう構築するかが社会教育の最も大事な点だと思う。それが宮崎県の活性化につながっていく。

また、今の青年を育てると同時に、これから青年になる世代を地域でどう育てるか、その視点を「みやざき家庭教育サポートプログラム」の活用も含めて考えていく必要がある。

このことについては、次年度の会議で意見をいただきながら、議論を深めていきたい。



(終)